

## 目 次

館蔵資料紹介 No. 31	情報の探し方 (6) …………… 6
人文科学の基礎研究 坂内 栄夫…………… 1	論文本文を探すとき SFX
寄贈図書一覧 (平成25年1月～6月) …………… 4	図書館からのお知らせ……………10
図書館本館が新しくなります…………… 5	

## 館蔵資料紹介 No. 31

人文科学の基礎研究 一平岡武夫・今井清校定『白氏文集』を通して一  
坂内 栄夫

本学図書館に、平岡武夫・今井清校定『白氏文集』全三冊 京都大学人文科学研究所刊\*1なる書物が所蔵されている(写真1)。「白氏文集」とは、中国・唐代の官僚であり詩人として有名な白居易(772～846)、字は楽天の散文・韻文作品を集めたものである。

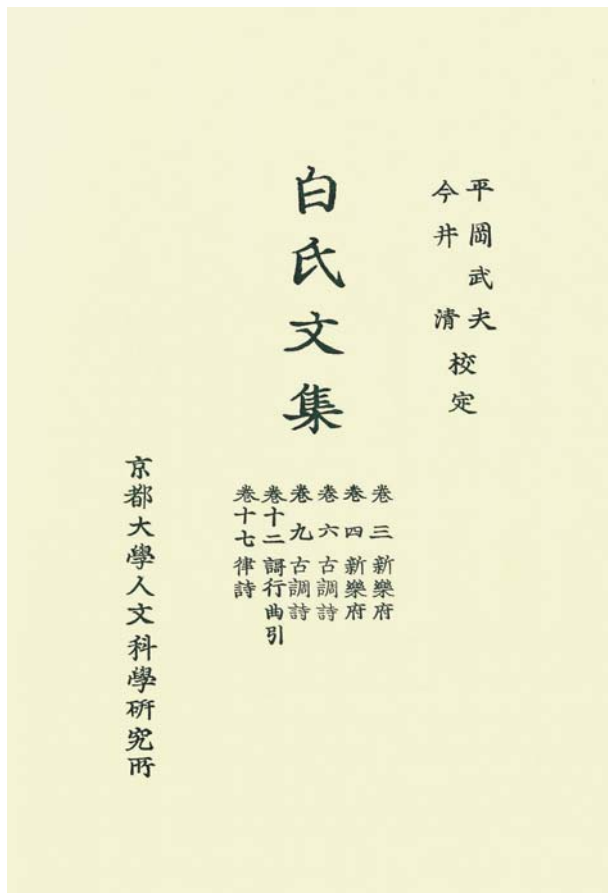
『白氏文集』について話をする前に、中国の書物について基本的事柄を述べておきたい。まず、一般的にある著作が存在するという事は、現実には具体的な形を持って存在している。例えば、『論語』を例に挙げるなら、『論語』という書物が抽象的に存在している訳ではなく、現実的には岩波文庫や講談社学術文庫・十三経注疏などという具体的な形を持って存在しているという事である。それについて中国古典学では、具体的な形を持った書物の方を「本」と言い(即ち、岩波文庫「本」・十三経注疏「本」である。印刷の場合、「版」「版本」ともいう)、一般的な存在を指す場合を「書」と言って区別している。つまり、「本」とは具体的なTextのことで(写本の「本」から来ている)、「書」の方は謂わば抽象的な存在、Bookを意味すると考えればよいだろう。

次に、中国における印刷について説明しておこう。周知の如く、印刷術は中国で発明された。年代が確実に判明している最古の印刷物は、法隆寺に伝わる

『百万塔陀羅尼』(天平宝字八年(A. D. 764))である。また、中国では唐の咸通九年(A. D. 868)の記年のある『金剛般若経』が最古である(年代不明のものとしては、則天武后(689～704)からそれ程遠くないと思われる『妙法蓮華経』が存在している)。従って、これらを考え併せるに、恐らく唐代前半(八世紀前半)には印刷術が発明されていたものと思われる。ただ、唐代で印刷されていたのは、経典などの宗教書か暦などの日用書がほとんどであり、経書や詩文集などの一般書籍が印刷されるようになったのは、次の宋代になってからだと考えられている。

中国古典の場合 一中国に限らず、西欧古典でもインド古典でも同様だろうが一、内容を正確に理解するためには、まずその作品のテキストを正しく確定する事が大前提となる。そのためには古いテキストが求められる。なぜなら、テキストが著者の時代に近ければ近いほど、筆写や彫版による過誤が起こる可能性が少なく、より正確だと考えられるからである。唐代以前の書物の場合、最も古い印刷物が一番古いテキストとなる。つまり、宋版が探し求められる事になる。

宋代の版本は、そもそも印刷された種類も部数も少なく、従って現在に残っている絶対数が少ない。その上、初めての事業なので印刷職人の質も高く校



(写真1 平岡武夫・今井清校定『白氏文集』)

正も厳密であったと考えられ、本文に対する信頼性は非常に高い。また、刻字・印刷も精妙で芸術的風格にも富んでいる事から特別に尊重されている。その価値は、状態さえ良ければ国宝や重要文化財に指定されるべき至宝と見なされる程である。

話を『白氏文集』にもどそう。白居易は、自分の作品に非常な愛着を持ち、自分で何度か文集を編集し、それを幾つかの寺院に奉納して後世に伝えようとした。その事は、『白氏文集』に残されている何篇かの序文から知る事ができる。白居易が編集した最後の文集の序文（「白氏文集後序」）は、次のように述べている。

白氏の前著『長慶集』五十巻は、元微之（稹）が序を書いた。『後集』二十巻は、自ら序を書いた。今また『続後集』五巻も、自分で文章を書いた。全部で七十五巻、詩篇は長短あわせて三千八百四十首。この文集は五部作った。一つは廬山東林寺経蔵院に納め、一つは蘇州南禅寺経蔵内に納め、一つは東都聖善寺鉢塔院律庫樓に納め、一つは姪の亀郎に与え、一つは外孫の談閣童に与えた。各おの家に所蔵して後世に伝えよ。日本や新羅の諸国、及び兩京の人々が写したのものについては、ここ

には記さない。……若し文集内に見えないのに（私の）名前を借りて伝わっている作品があったら、それらは全て偽物である。会昌五年（845）夏五月一日、樂天が重ねて記す。

会昌五年は、白居易の死ぬ一年前、74歳の時である。ここに見えるように文集は、前集（『長慶集』）50巻、後集20巻、続後集5巻、全75巻という構成であった。現在残る文集は71巻（続後集5巻が散逸して、1巻に纏められたと考えられている）、収録作品数は3670首。ただし、他の文献に収められる作品も集めると、3800首ほどが残っている。1200年という時の隔たりを考えるなら、驚異的な伝存率と言えよう。また、白居易自身が日本や新羅で、自分の作品が読まれていた事を知っていたことも注目に値するだろう。

この文章が書かれた前年、即ち会昌四年（844）に日本から来た惠萼<sup>がく</sup>という留学僧がいた。折しも武宗による会昌の廢仏のさなか、彼は五臺山へ巡礼する事もできず蘇州南禅寺に滞在していた。そこで白居易が自ら納めた文集を発見し、全文を筆写して日本に持ち帰った。惠萼が持ち帰った写本（中国学では鈔本という）それ自体は失われてしまったが、それを転写した何代目かの写本（重鈔本という）がかなりの数伝わっている。これら鈔本を見る事によって、白居易自身が編んだ唐代の姿を推定する事ができる。この鈔本は金沢文庫（横浜市金沢区称名寺）に伝わったので、通称「金沢本」と呼ばれている。ただ、伝わっている鈔本は、全てを併せても文集の三分の一ほどに過ぎない。また、その全てが惠萼の筆写本を転写したものではない。しかし、今では失われてしまった宋版やそれ以前の姿も何う事ができる、貴重な写本群である。その内、惠萼筆写本を転写した例として、五十九巻末の惠萼の識語を挙げよう。〈〉で示した文字は、実際は小字の注記である。

会昌〈菅无〉四年夏五月二〈六本〉日、写得勘了。惠萼。

郷人發近（進？）、不能再勘之。

白氏後集卷第五十九

会昌四年夏五月二日、筆写し校勘できた。惠萼。

村の人がやって来たので、もう一度校勘する事ができなかった。

白氏後集卷第五十九

これは、会昌四年の五月二日に、惠萼自身が『白氏文集』を筆写したのだろう。最初の〈菅无〉は、菅家の伝来鈔本には「会昌」の二字が<sup>な</sup>無い事を注記している。同じく〈六本〉は、別の鈔本（菅家伝来本以外？）では「二日」ではなく「六日」となっていた事を記している。このように、惠萼が南禅寺で筆写した白氏文集が転写を重ねて今日に伝わってき

た事が、この識語から明らかになる。また、五十九巻の巻末が「白氏後集巻第五十九」となっている事で、「白氏文集後序」にあるように、前集・後集の構成となっていた事も確認できる。現在に伝わる宋版『白氏文集』は、前集・後集の構成になっていないので、この鈔本は唐代のオリジナルの姿を伝えていると考えられるのである。

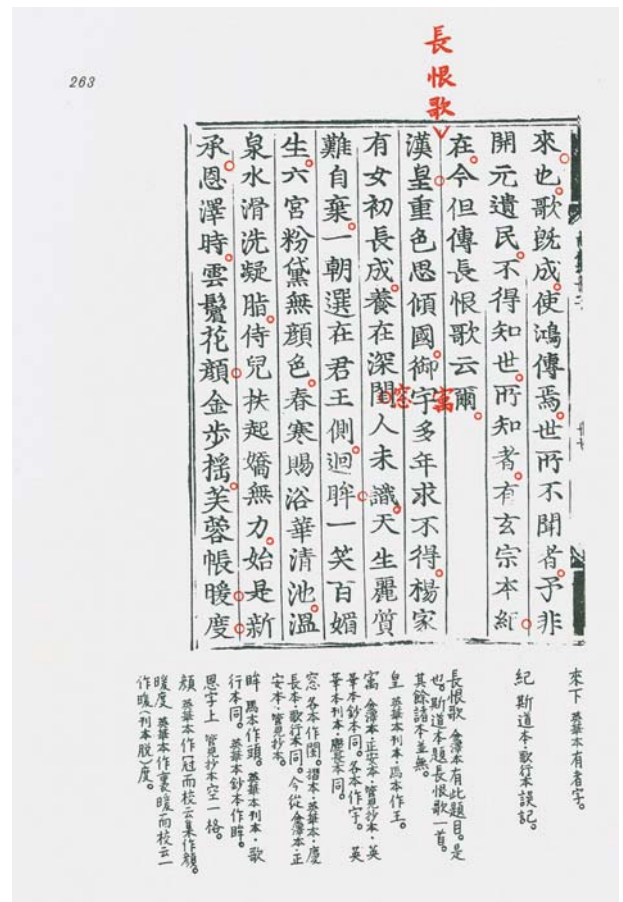
それでは、副題に挙げた平岡武夫・今井清校定『白氏文集』とは何であろうか。一口に白居易の文集と言っても、「書」としては一つであるが、「本」として考えると数多くのテキスト（版本）が存在している。「校定」（「校勘」ともいう）とは、その数多くのテキストを比較して文字の異同を調べ、著者の書いた最初の形にできるだけ遡ろうとする行為である。特に、中国の場合は漢字なので、一文字の違いが大きな意味の違いを生み出す可能性がある。校勘の重要性は、想像に難くないだろう。校勘によっても、ほとんどの場合は宋代以前の形に遡る事は不可能である。しかし、白居易の場合は金沢本の存在によって、奇跡的に唐代の姿にまで遡れる可能性がある。そのため、日本・中国に伝わる各種版本・鈔本を総動員して唐代のオリジナルな形に近づこうとしたのが、平岡・今井校定『白氏文集』なのである。実際には、版本を調査して系統を調べ、その中の一つを底本と定める。その上で、各本の文字の異同を調査したり、文字を改めたりという作業を行っていく。校定本『白氏文集』の場合、底本は江戸時代に那波道円(1595~1648)によって刊行された通称「那波本」、そして校勘は主に金沢本が存在する巻を対象に行われている。つまり、金沢本によって那波本の文字を訂正し、唐代の姿に戻ろうとするのが校定本『白氏文集』の基本姿勢なのである。金沢本の存在価値がどれ程のものか、想像してもらえらるだろうか？

では、校定本『白氏文集』の実際を見てみよう。写真に掲げたのは、玄宗皇帝と楊貴妃の恋愛を詠った「長恨歌」(巻十二)の冒頭部分である(写真2)。那波本の本文は、以下の通り。

漢皇重色思傾国。御宇多年求不得。  
楊家有女初長成。養在深閨人未識。

本文が墨色で印刷され、読点と訂正が朱筆で記入されている。そして、下の欄外(「地脚」)に校記が書かれている。先ず、初句の前に上の欄外(「天頭」)に、「長恨歌」の三文字が挿入されている。それについて校記は、以下のよう記す。

長恨歌 金沢本有此題目。是也。斯道本題長恨歌一首。其餘諸本並無。  
長恨歌(の三文字)、金沢本にはこの(「長恨歌」という)題名がある。それが、正しい。斯道文庫本は「長恨歌一首」と題している。



(写真2 校定本『白氏文集』「長恨歌」)

その他のテキストにはみな(「長恨歌」の三文字は書いて)ない。

金沢本(と斯道文庫本)には「長恨歌伝」の後「長恨歌」が始まる箇所に「長恨歌」と題名が書いてあるのに対し、他のテキストには全て題名は書いてない、題名が書いてあるのが正しい、と述べている。(なお、「~本」「~本」とあるのは、全て白氏文集の数多あるテキストの名称である。詳細は校定本『白氏文集』の序説に説明されている。)

次に、初句「漢皇重色」の「皇」字の横に小円がついている。その校記は、以下のように述べる。

皇 英華本刊本・馬本作王。  
皇(の字)、英華の刊本と馬本は「王」字に作っている。

「漢皇」とある所、『文苑英華』の刊本と馬本『白氏文集』は、「漢王」となっている、という意味である。ここは、異同を示しているだけで、校定者は「漢皇」が正しいと判断しているため、文字を改めていない。次に、二句目「御宇多年」の「宇」字の横に「寓」と書かれている。校記は以下の通りである。

寓 金沢本・正安本・管見抄本・英華本鈔本同。各本作字。英華本刊本・慶長本同。

寓（の字）、金沢本・正安本・管見鈔本・英華の鈔本は同じ（「寓」）である。その他のテキストは「宇」に作っている。英華の刊本・慶長本も同じ（く「宇」）である。

金沢本・正安本・管見抄本・『文苑英華』の鈔本だけが「寓」に作っていて、その他は全て「宇」であるという。ただ、「寓」は「宇」の古い字体で同じ文字であるから、訂正する必要はなく、異同を注記するに止めたのである。最後に第四句、「養在深閨」の「閨」字が朱圏で消され、横に「窓」と訂正されている。校記は、以下のように述べる。

窓 各本作閨。摺本・英華本・慶長本・歌行本同。今従金沢本・正安本・管見抄本。

窓（の字）、各テキストは「閨」字に作る。摺本・英華本・慶長本・歌行本も同じ（「閨」）である。今は金沢本・正安本・管見抄本（が「窓」字に作るの）に従う。

現行のほとんどのテキストが「深閨」に作るのに対し、主に金沢本に依拠して「深窓」に訂正している。校定者は、白居易が書いた文章は「深窓」であったろうと判断しているのである。試みに、手近な「長恨歌」を見てみれば（例えば、岩波文庫『白楽天詩選』など）、詩句が「深閨」となっているのが分かるだろう。このような形で、金沢本の伝わる巻の『白氏文集』校勘を試みたのが平岡・今井校定『白氏文集』なのである。

中国古典の場合、基礎的な本文校勘は、清朝の学者によって既に完成している場合が多い。現在の我々は、先人の基礎研究の上に研究を行っているのである。文献を扱う人文科学において、先にも述べた通りテキストの確定が内容理解の前提となる。そして、新たな資料の発見に伴って再び校勘を必要とする場合もあり、校勘の必要性はなくなる事はない。

校勘は、諸本の異同を調査するという誠に地道な作業の連続であり、面白いものではない。しかし、人文科学の基礎研究に当たるもので、この作業なくしては人文科学の研究は成立しない。中国古典学の場合も、数多くの優れた研究成果は、すべてこれら校勘された本文の上に成り立っている。どのような学問分野であろうと、地道な基礎研究を疎かにしては研究の発展は望めない、という事は真実なのではないかと思う。

#### 〈参考文献〉

- ・『白氏文集』 平岡武夫・今井清校定 三冊 京都大学人文科学研究所 1971～73
- ・『白居易』 平岡武夫 中国詩文選17 筑摩書房 1977
- ・『文選・趙志集・白氏文集』 天理図書館善本叢書第二巻 八木書店 1980
- ・『和漢書の印刷とその歴史』 『長沢規矩也著作集』 巻一 汲古書院 1982
- ・『金沢文庫本 白氏文集』 川瀬一馬監修 勉誠社 1983～84
- ・「金沢文庫本白氏文集巻第五十九の校勘」平岡武夫『神田喜一郎博士追悼中国学論集』 二玄社 1986
- ・『中国目録学』 清水茂 筑摩書房 1991
- ・『白居易年譜』 朱金城 上海古籍出版 1982
- ・『白居易集箋校』 朱金城 上海古籍出版 1988

（さかうち しげお：教育学部教授）

- \* 1 図書館1階 集密書庫5 請求記号921.43 Kyo  
図書館3階 今西文庫 請求記号921.43 Kyo

## 寄贈図書一覧（平成25年1月～6月）

平成25年1月～6月に図書館にご寄贈いただいた図書の中で、本学教職員が著作・編集・刊行等に関係した図書を掲載します。ご寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、ご寄贈をお願いいたします。

- 山田敏弘（教育学部）
  - ・岐阜県方言辞典 全3巻
  - 【本館3階 818.53||Gih】
- 杉原利治（名誉教授）
  - ・故玩館への招待：ネットオークションで骨董・アンティークを蒐める一論創社
  - 【本館3階 756.8||Sug】
- 長谷川泰道（名誉教授）
  - ・Control problems of discrete-time dynamical systems-Springer
  - 【本館積層4階 408||Lec】
- 林琢也（地域科学部）
  - ・長良ぶどう発達史：岐阜市園芸振興会果樹部会（長良ぶどう部会）三十五周年記念誌—長良ぶどう部会・記念誌出版実行委員会
  - 【本館3階 625.61||Nag】